

日本文学研究資料叢書

日本文学研究の方法

近代編

有 精 堂

228763



日文 701539262

日本文学研究資料叢書

日本文学研究の方法

近代編



日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

ISBN4-640-32501-0

日本文学研究の方法

近代編

定価 3200 円

昭和 59 年 7 月 10 日 発行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町 1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話03(291)1521~3番

振替口座 東京 9-40684

Printed in Japan

ISBN4-640-30100-6 C3391

目 次

学問と芸術——フォルシュングとしての学問——……………内田義彦…一

現代文学研究者になにを望むか……………大江健三郎…二五

「原光景」と「原風景」……………高橋義孝…三〇

文学理論の新しい地平……………針生一郎…三三

読者論と文学史——挑発としての文学史——をめぐって……………小田切秀雄…三六

*

日本文学史研究の展望 近代文学・現代文学——戦前——……………稲垣達郎…五〇

日本文学史研究の展望 近代文学・現代文学——戦後——……………三好行雄…五五

——その一面的かつ図式的な展望——

読者論小史——国民文学論まで……………前田 愛…五九

*

現代文学覚え書(一)——作品は作家への通路であるか?——……………山本健吉…二〇五

鑑賞と批評……………三好行雄…二二

「注釈」のあり方……………関 良…二六

——近代文学研究における注釈の意味を考えるために——

作品論と文学史——問題点の素描——……………内田道雄…二五

〈個人の神話〉から〈文体〉へ……………原 子朗…二六

——言語分析から文体論へ——

作品解釈の一方方法……………山崎 正和…二四

文学の研究ということ……………杉山康彦…二五

批評について……………吉本隆明…二七

文学史論の方法……………亀井秀雄…二七

読者論・ジャーナリズム史の有効性……………山田有策…二八

*

円朝における身ぶりと象徴……………鶴見俊輔…二七

毒婦と驕女……………亀井秀雄…二九

〈日本幻想派〉の覗きと触覚……………篠田知和基…三四

——フランス幻想文学理論から見た露伴・鏡花・折口・百閒における〈目〉
のファンタズムと〈手〉の侵犯性、そして〈書くこと〉の幻想——

オフィーリアの幻影……………堀切直人…二四

——ラファエル前派・夏目漱石・大岡昇平

虚構と時間——『虞美人草』について……………石崎 等…二五

代助の感性——「それから」の一面——……………吉田 熙生…二六

都市の周縁 市村弘正 二六二

市村弘正「都市の周縁」をめぐって 藤田省三 二六九

*

解説 石崎等 二九〇

日本文学研究の方法 近代編 主要研究参考文献 石崎等 三三三

執筆者一覧 三四

学問と芸術

—— フォルシュングとしての学問 ——

内田 義彦

「大学とは何か」、「学問とは何か」という主題の連続講義の一環として、「科学と芸術」という問題をあたえられましたが、両者の関係を真正面からお話しする資格もありませんし、つもりもありません。連続講義の主題である学問の話を題にひっかけてします。

「科学」という言葉も人文学を含めた「学問」におきかえます。学問と芸術があまりに切りはなされているということのなかに日本の教育と学問で反省すべき点が現れているとおもいますので、その視角からお話をして、大学という場所これから学問を——芸術ではなく——進めてゆかれる上の参考に供したい、とおもいます。

本題に入る前に、話しておきたいことが二つあります。

第一は、——くり返し述べていることで重複の感があるかも知れませんが——始めての方も多いと思いますので申上げておきますと、——日本の学問の両極性を掴むということです。日本の学問はある面で大変進んでいる、が、他方で根本的な遅れがある。この両極をとともに、ハッキリ掴むことが肝要で、平板に平均化して中間ぐらいの発展程度などと考えると、日本の学問の性格・問題点は見失

われてしまう。

日本の学界は、「高度成長的性格」という点で、日本の経済界と似た性質をもっていると考えられます。

今日、日本の経済界を、単純に「後進的」とか「停滞的」とかいふ人はいない。大変進んでいます。中進的ですらない。先端をいつている。先端に立って進んではいるけれども根本的なところで遅れがある。「遅れ」た面が経済の高度成長を阻止するのではなく、むしろ高度成長に拍車をかけて、高度成長それ自体のひずみをひどくしている。えらく遅れた面があるからやたらに進むという面と、がむしやらに進むからひずみが一そう強く出るといふ面があつて難しいところですが、何れにしても両つの極があり、その両極が規定し合っているところに特質がある。遅れている面だけを把えたり、進んでいる面だけを把えたり、また平板に平均化して「中進的」などと考えたり日本経済に特徴的なことは見失われる。それと同じことが学界（あるいは文化界・教育界）についてもいえます。一方で極めて進んでいる。しかし他面、根本的な遅れがある。しかもこの二つの極は相互に規定し合つて日本の学界や文化界や教育界に高度

成長的性格をあたえている。「ここ」は遅れているからその「遅れた部分」を「近代化」に直しまししょう、などと安易に切り離して考えると「近代化」のひずみは一そう強くなる。日本の学界の高度成長的性格を全機構的にとらえなければならぬ。これが第一点です。御了解を得ておきたいことの第二は、比較という視点についてです。

いま日本の学界および経済界について、ある種のひずみがあるといいましたが、このひずみは日本にだけあってヨーロッパやアメリカには無いというものではありません。経済界についていいますと、例えば環境汚染——むしろ環境破壊——は、今日地球的な規模で世界全体が当面している問題であつて、日本に独自などとは到底いえない。むしろ日本経済の現状は、世界の問題を典型的に示していると見ていい。日本は、その意味では、「例外」あるいは「変則」ではなく「典型」です。学界もまた然りで、諸学問が余りに細分化されていて結びつかないとか、素人と専門家の分離が固定化してくるとか、目の当る学問とそうでない学問分野の格差が目立つとか、総じて学問が人間不在の学問になっているといった、日本の学問が蔽している問題は、日本だけでなく世界の学問が等しく当面しており、鋭く問われている問題であります。ここでも日本は「例外」ではなく、ある意味で「典型」です。

しかし、では、どこにでもあるのだから日本を「比較的」に見ることは間違いだと言えるかという、そうはいかない。何故かというと、世界に共通の問題が外ならない日本で真先きに集中的に起るのは何故か、という問題があるからです。環境汚染が日本で集中的に起つて、その恐るべき事態を世界の将来に向つて警告する展示場になっている。人間と自然の破壊の「典型」に日本がなる。それ

は、何かある、特質が日本経済にあるからでしょう。「特質」があるから「典型」になる。そういうロジックがある。そこでどうしても「比較」という視点の導入が必要になる。学問でも同じです。

私はよく比較という言葉を使います。きょうも比較という観点を押し出しながら話をすすめます。しかし、私は、ヨーロッパを理想化しているわけではもちろんありませんし、日本の特殊性の検出だけを目当てにして比較をしているわけではありません。経済でも学問でも、いまのままの形ではヨーロッパによって始められたもののは先は見えている。いや、そういういい方はまだ生ぬるい。ヨーロッパ的なものこそ、今日の事態を招いた張本人であるという自覚を、われわれとしては持たねばならないでしょう。ヨーロッパ的なものをもう一度考えなおして見なければならぬ時点にきているわけですが、その「ヨーロッパ的なもの」を、ある意味ではもつともうまく、人によつては日本を近代化のチャンピオンに見立てるぐらいうまく、しかし、今日の危機状態からあらためてふり返ってみると、その最も破壊的で愚劣な面を見ならい仕上げてきたのが日本であつた。そういう視角から、ヨーロッパの行き先きを示す形で日本に典型的にあらわれている問題を尖鋭に掘りおこすためにこそ、比較という観点をいれて日本に特殊なものを見なければならぬ、とおもふのです。この点も御了解を得ておきたいとおもいます。

一、フォルシュングの探究

1

明治四十二年十月に森鷗外が「当流比較言語学」という小文を書いていました。比較言語学という大げさな言葉に当流という言葉を使った、鷗外一流の凝った標題ですが、時代の思潮を自己流の比較言

語学で照射したその中身がなかなか面白い。いま読んでも面白いので、それを読んで話のいと口にします。

或る国民には或る詞が關つてゐる。何故關つてゐるかと思つて、よく／＼考へて見ると、それは或る感情が關つてゐるからである。

手近い処で言つて見ると、独逸語に Streber という詞がある。動詞の streben (努力のシュトレベンです) は素と体で無理な運動をするやうな心持の語であつたさうだ。それからものがくやうな心持の語になつた。今では總て抗拒(抵抗)を排して前進する義になつてゐる。努力するのである。勉強するのである。随て Streber は努力家である。勉強家である。抗拒を排して前進する。努力する。勉強する。こんな結構な事は無い。努力せよといふ漢語も、勉強し給へといふ俗語も、学問や何か、總て善い事を人に勧めるときに用ゐられるのである。勉強家といふ詞は、学校では生徒を褒めるとき、お役所では官吏を褒めるときに用ゐられるのである。

然るに独逸語の Streber には嘲る意を帯びてゐる。生徒は学科に骨を折つてゐれば、ひとりでに一級(クラス)の上位に居るやうになる。試験に高点を贏ち得る。早く卒業する。併し一級の上にゐよう、試験に高点を貰はう、早く卒業しようと思つて心掛ける、其心掛が主になることがある。さういふ生徒は教師の心を射る(的にする)やうになる。教師に迎合するやうになる。陸進をしたがる官吏も同じ事である。其外学者としては頻に論文を書く。芸術家としては頻りに製作を出す。えらいのもえらくないものもある。Talent の有るのも無いものもある。学問界、芸術界に地位を得ようと思つて骨を折るのである。独逸人はこん

な人物を Streber といふのである。

.....

僕は書生をしてゐる間に、多くの Streber を仲間を持つてゐたことがある。自分が教師になつてからも、預かつてゐる生徒の中に Streber のゐたのを知つてゐる。官立学校の特待生で幅を利かしてゐる人の中には、沢山さういふのがある。

官吏になつてからも、僕は随分 Streber のゐるのを見受けた。上官の御覚めでたい人物にはそれが多い。秘書官的人物の中に沢山さういふのがある。自分が上官になつて見ると、部下に Streber の多いのに驚く。

Streber はなまけものやいぐちなしよりはえらい(これも覚えておいて下さい)。場合によつては一廉の用に立つ。併し信任は出来ない。学問芸術で言へば、こんな人物は学問芸術の爲めに学問芸術をするのでない。学問芸術を手段にしてゐる。勤務で言へば、勤務の爲めに勤務をするのでない。勤務を方便にしてゐる。いつ何とき魚を得て釜(魚をとる道具。釜踏などと使います)を忘れてしまふやら知れない。

日本語に Streber に相当する詞が無い。それは日本人が Streber を卑むといふ思想を有してゐないからである。

本当かな、と思つてミュレット・ザンデルの独英辞書で Streber を當て見ますと、まず pushing person とある。人を押しのけてぐいぐいと前へ出てくる奴です。それから ambitious officer or official とあつて、place hunter というのが出ています。地位を求める人々なんていいですね。モレーツ人間とか何とかアニマルの類い、それがシュトレバーというわけです。

ところで、ややこしいのは真中にある ambitious official とい

うのは Boys, Be ambitious! なんていいましよう。この場合のアンビションは大志 lofty ambition で、モーレッツ人間の野心とはちがう。むしろ、お金や地位なんてけちくさいことを考えるなという意味を含めている。小商人根性をすてて志を大きくもてというのが、ビー・アンビシアスです。しかし同時に ambitious person は野心家のことでしょう。その二つがくっついているのでややこしい。野心作という場合は、一面、既成の学界とか芸術界の評判なんて冀くらえ、そんなものにこだわらず新風をといった大志を含んでいる。いるんだが「何とかが放つ野心作」なんていう、広告だとか本の帯封によくある言葉は、大志が美事商魂にくるみこまれていることを示す見本ととれなくはない。帯封だけでなく中身も御本人が気がつかないうちに変質しているんじゃないか、という疑さえ出てくる。そういうややこしいアンビションをもつて大いに努力するのが Streiber だ。

モーレッツ人間とか何とかアニマルという、ハッキリはするけれども他人事みたいになりましよう。何のために大いに努力し大いに勉強しているのか、自分自身にドキリとつきささってくる言葉ではない。そのあたりのことを鷗外は言っているのです。

鷗外のこの言葉は、その少し後、明治四十四年の「妄想」に対応しているとおもいます。「妄想」の方は、自伝的要素もあり、幸徳事件がその連なりもあって割合によく知られているものですが、「当流比較言語学」とからめてみることで含意が「そう鮮明に出るとおもうので引用しておきましよう。まず、私は研究を止める、「自然科学よ、さらばである」という有名な一句の後にこうあります。

只奮闘してゐる友達には気の毒である。依然として雲間気（学問の雲間気）の無い処で、高圧の下に働く潜水夫のやうに喘

ぎ苦んでゐる。雲間気の無い証拠には、まだ Forschung（英語のインクワイアリー）といふ日本語も出来てゐない。そんな概念を明確に言ひ現す必要をば、社会が感じてゐないのである。自慢でもなんでもないが、「業績」とか「学問の推挽」とか云ふやうな造語を、自分が自然科学界に置土産にして来たが、まだ Forschung といふ意味の簡短で明確な日本語は無い。研究なんといふぼんやりした語は、實際役に立たない。載籍調べも研究ではないか。

鷗外は衛生学をやつていて、いろいろな意地悪をされた。なまじつかフォルシユングなどせずに「研究」をしていればいいものを、そうしなかったばかりに意地悪をされる。そういう経験をもっているわけですから、「高圧の下に働く潜水夫」というのは感じが出ています。数多くの術語を造つたはずの鷗外が、自然科学界に残した造語として、わざわざ「業績」とか「学問の推挽」とかいふシュトレバー的な臭いをただよわせる用語だけをあげて「フォルシユングに当る日本語が無い」ということに対応させている、その意図も明白です。大志を懷いてフォルシユンすることが上下に満ちあふれたシュトレバーたちによつてさまたげられる。日本とはそういう所だということを、この二つの文章は、それぞれ別個のところから言っているわけですね。

何れにしても、「妄想」が手法の上でも内容の上でも「当流比較言語学」の延長線上にあり、それと関連をもっていることは、こうして二つを並べてみると明らかでしょう。内容の上でも関連があることを示すために、いま一つ、「妄想」からの引用をつけ加えておきます。主人公がドイツ留学中、心にきざしたことを記しているところですよ。

自然科学のうちで最も自然科学らしい医学（というのは氣になる言葉ですがしばらく外しておきます）をしてゐて、exactな學問といふことを性命にしてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生といふものを考へる。自分のしてゐる事が、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思ふ。

生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ驅られてゐるやうに學問といふことに齟齬してゐる。

これは自分に或る働きが出来るやうに、自分を為上げるのだと思つてゐる（つまり「何か」のために大いに「努力」し「勉強」しているわけですね）。其目的は幾分か達せられるかも知れない（何しろドイツという、フォルシュングの雰囲氣があるところにいるのですから）。併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に（努力の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ驅られてばかりゐるために、その何物かが醒覺する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供「勉強したまえ」というあの勉強です）から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留學生といふのが、皆その役（自分が物心つき次第次々と勤めてき今も相勤めてゐる役）である。赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗つて、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひししながら、舞台監督の鞭を背中を受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が眞の生ではあるまいかと思はれる。併しその或る物は目を醒まさう醒まさうと思ひながら、又してはうとうとして眠つてしまふ。此頃折々

切實に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波に揺られて遠い処へ行つて浮いてゐるのに、どうかするとその揺れるのが根に響くやうな感じであるが、これは舞台でしてゐる役の感じではない。併しそんな感じは、一寸頭を挙げるかと思ふと、直ぐに引つ込んでしまふ。

この「何物か」を故郷で追求するために「妄想」の主人公はフォルシュングの雰囲氣もあり、「先生」も「相談相手になる書物」も、一般に學問をするための「種々の要約」がととのつてゐるドイツを去つて、日本に帰つてくる。「義務の爲めに」ではない。「自然科学を育てる雰囲氣のある便利な國」で研究に専心しながら「心の飢え」を感じる。その「心の飢え」が、「願望の秤」を——反對に引く舞姫の「白い手」にもかかわらず——「便利な國」に対して「夢の故郷」にかたむけさせたからだ。ところで日本はどうか。いや自分は——舞姫の白い手をふり切つて「故郷」に帰つたはずの自分は——故郷をさがさないえたか。その後が先に引用したところです。

鷗外の、——「岩見人森林太郎トシテ死セン」（遺言）とした鷗外の——この二つの文章を、こうして、日本文化の状況を（外からと内からと）照射したものとして把えてみますと、漱石の「現代日本の開化」という有名な講演（明治四十五年）がすぐ心に浮かんできます。

日本は、ヨーロッパから遅れて、ヨーロッパが何百年もかかつてやったことを何十年かで追いつこうと、無理を重ねて、神経衰弱になつて、神経衰弱にならぬほうがむしろおかしいという状況を一手にひきうけて、一生懸命やつてゐる。やつてゐるが何ともおかしい。おかしいが止むを得ない。そういうおかしさを意識して耐える

他ない、という奴です。この方は大変有名で、日本文化の外発性を問題にする時必ずといっていいくらい引合いに出される言葉ですが、いま引用した鷗外のものは、それにちょうど対応しているかと思えます。

何故漱石のもののばかり有名で鷗外の言葉は完全にといいくわい忘れさられているか。社会科学者として気にかかることの一つです。が、その点の穿鑿は止めます。大事なことは、明治の保守派鷗外の文章がいまなお光っているという事実です。

日本はヨーロッパより遅れて出発した。おくれて出発したことは確かに事実で、そのことが日本の経済界なり学界・文化界のひずみの原因になっているということも言えなくはない。しかし、いまふりかえって考えてみると、こうしたひずみは、遅れて出発した日本が、ヨーロッパを模範あるいは到達点にして、それに急速に追いつくために、明治というある時点ないしは段階で、必然に生じたというだけのものではない。

さいしよにいいましたように、今日の日本はもうヨーロッパに追いつく課題をしょって、そのためにあせっているんじゃない、ある意味ではヨーロッパをとうに追抜いている。その追抜いたいま、依然として、いやますます鷗外の言葉が当てはまる。つまり、鷗外が指摘した事実は、段階的というよりも構造的な事実、日本の「近代化」の進行によって消えさるものではなく、むしろ、「近代化」とともに一そう深まってくるもの、と考える外ありません。

もっとも明治以前にどうであったか。この点は何とも言えない。むしろ、当面、「開国以後」ヨーロッパ的なものの取り入れ方の問題として考えるべきでしょう。これは、アジアのなかでただ一つ日本が「近代化」に成功して工業国になり、植民地にならなかった、し

かし同時に、それは脱アジア化というか、アジアのなかでただ一つ植民地保有国というヨーロッパ的特性をもつ国になった——いまなおその性格は失われないどころか或る意味で一そう強まっている——ということに対応しているかと思えます。

日本の経済も、日本の学問も、日本の教育も、鷗外というシュトレイバーによって、大変な勢いで「進歩」してきました。その「業績」人の眼を奪うに足るものがあります。

経済については言うをまちません。搾取（アウスボイトウング）という言葉は、開発すること、開発したものを奪取すること、開発によって掘りつくし荒廃させてしまうことだということは、「資本論の世界」で述べておきましたが、日本の国土も人間も、シュトレイバーたちの努力によって開発し掘り尽されてしまった感があります。（それについては「日本資本主義の思想像」を読んで下さい。そこではシュトレイバーは「バリア力作型経済人」という名を帯びて登場しています）。

学界もそうで、アンビションにみちあふれた研究者によって、大変な高度成長をとげました。日本の学界は「永遠にヨーロッパの学術の結論だけを取りつく場所たるに過ぎない筈」はない、「日本で結んだ学術の果実をヨーロッパに輸出する時も何時かは来るだろう」という鷗外の夢は、ある意味では果されています。が同時に根本的なひずみがある。そしてそのひずみは、いまのままの状態の延長線上で、「発展そのもの」によって解決されるというようなものではない。根本的な反省——それが無ければこれ以上の量的な発展はますますもって学問公害を大ならしめるだけであるし、それが あることによつて、学問的蓄積が貴重な遺産として意味をもちうるような、根本的反省——を強いられています。しかし、その根本的反省

の徴候はあるか。

2

日本の学界は、高度成長的性格という点で、日本の経済界のそれに対応しているし似ている、といいました。似ているんだが何所が違うかというとき自己認識の程度がちがう。つまり経済界の方が、進んでいる面についても遅れている面についても、まだしも——外からせまられながらも——自己認識をもっている。しかし学界はそうではない。進んでいる面についても、根本的なおくれについても、自己認識は希薄です。しかも、二つはからんでいる。進んだ面の自己認識が足りないという面に「遅れ」が現れているし、根本的な「遅れ」の自己認識が鋭いきばをまたないために、折角進んでいる面を生かす認識が出てこない。というわけでからんでいるんです、一応分けて考えてみましょう。

まず進んでいる面の自己認識はどうか。先ほど私は日本の学問がある意味で極めて進んでいるといいました。自然科学の方でよく頭脳流出なっていますが、社会科学の方でも個々の点についていうと日本の方が進んでいる場合がいくつもあります。しかし、その自己認識は、余りにもといっていくらい、少ない。

研究論文をみて、ははんと感心するのは外国文献の羅列です。外国の文献が排他的に引用されます。この点では日本の研究の方が進んでいると思われる場合でも明示的に引用されるのは、まず、外国人のものです。G. O. H. ページというようなことが、読んでいるかどうか知りませんが、注にずらりとならんでいます。その方が研究論文らしく通りがいい。外国文献を並べておかなければ通らないし、並べてさえおけば学術論文として最低限通る。そういった雰

囲気が学界にあります。そこで、個々の論文も自然にそういう——学問的というより——学界的、雰囲気を持ってあります。そういうところがまた逆に学問の世界に学界的雰囲気を作りあげる。「政治の論理」に、政治の論理ならぬ「政界の論理」(福島新吾さんの言葉)がまといついていて、政治家であるためにはまずもって政治屋であらねばならんといったことを思わせるものが学問の世界にあって、「学問の論理」が「学界の論理」に——しかも学問の名で——ねじふせられている。

外国文献の引用が悪いとか引用しなくていいといっているのはありません。学問をやる場合、自分のテーマについての研究史は押さえておかなければならない。研究のための必須の予備作業として。その意味で研究そのものの構成要素として。これは学問の論理です。しかし、予備作業(の一つ)として、その意味で研究に不可欠でもあり研究それ自体の一部ともなる「研究史」の整備状況が、外国文献の表示のみによって示される、という学界の論理が問題だといっているのです。すると、外国文献の表示がすなわち学問であるかのような錯覚が研究者におこってくる。学問創造の予備作業の一部にすぎぬものと学問創造それ自体が混同され、同じ予備作業(であり同時に研究それ自体に不可欠な構成要素)でも、研究史の整備以外のものの重要性は見失われる。研究には研究史の整備以外にも必要なことがあるのにそれが見えない。研究史の整備という作業それ自体についても、外国のものに一方的にもたれかかり、他のさまざまな(一見テーマに関係がないような)領域で出されている日本のものを無視することによって、不十分な、まことに平板な形でしか遂行されないことになります。

そもそも研究テーマそれ自体が、研究史から、いわんや外国の研究

有史から自動的に出てくるものではないでしょう。逆ですね。日本の学問の最良のもの——最良とみなされているかどうかは別です——は、日本の現実が提言している問題をそれぞれ何程か反映している。それをくみとって自分の学問を作つてゆくというのでなければ、諸学問は、それぞれがいくらすすんでも日本の学問へと結びついてこない。輸出学問という名の輸入学問の性格を脱しきれません。

とにかく、日本の研究のほうが進んでいると思われる場合でも、まず向うのものを引用するという風習は、気になることの一つです。私はときどき論文を読んでいて latest goods from abroad という、late の用例として中学の時教わつた例文を思い出して苦笑します。

「読む」場合でも、外国人のものがよく読まれます。日本人のものはお互いに余り読まない。少なくとも深くは読まない。日本語のものだつて深く読まなければ何も語りかけてはくれないでしょう。読みこむことだつて外国のものの場合同様、時には必要です。ところが読まない。読みこむどころか読み飛ばす。もつとも、悪い所は読みとばさないようですけれども、なるべくお互い日本人であるところのものから感銘を受けないかたちで読む。あるいは引用する。外国文献を読む場合と反対です。

学問の国際交流なんかでもそうです。もつとも学問の国際交流といえるほどのものがあつたか。せいぜい学界の国際交流にすぎぬといつていいかと思いますが、その学界交流を例にとつても、例えばマルクスの新しい全集を作る場合にも、日本からも参加した方がお互いにある。日本の研究の現状からみてそう思います。が、そういう雰囲気はあまり盛り上げられない。こと国際交流に関するかぎり、受

身というか、低姿勢もいいところです。外国の学者に対しては低姿勢、同じ日本の学者に対してはお互い高姿勢で、評価をしない。評価しないで評価を下す傾向が強い。その評価の基準は学問なのか、外国の学界、あるいはその出店であり出店特有の「相対的自律性」なる名の歪みをもつた日本の学界か。

これは欧米崇拜の名残りと考ええることも出来ます。あるいは、ホップスという口の悪い男が、学者は同時代人の説は無視して過去の偉人を持ち出す。昔の人をはめることによって同僚の地位を相対的に低め、自己の地位を相対的に高めることが出来るからであるというようなことをいつていますが、案外そういうしみみちいことがあるかも知れません。

また根本的な欠陥があるという点の自己認識も少ない。日本にフォルシュングの雰囲気が無いといつてのけた鵬外のほうが、まだしも的確な自己認識をもつていたのではないか。

鵬外が「日本にフォルシュングの精神がない」といつた時、イメージとして思い浮かべていたのは恐らくゲーテの「ファウスト」であつたろうと思います。

フォルジャーであるファウスト。「勉強家」であり、そういうものとして大変な「努力家」ワグネル。そのワグネルをファウストが軽蔑しながら、「地霊」の出現によつて本質的にワグネルと変らないことを悟らされたところから始まるこの芝居——メフィストとファウストとの有名な対話をメフィストとワグネルのそれと較べ合わせながらよむと、両者の対極的な学問態度が出ていて面白いです——は、鵬外発言の底におかれていますと思うんですが、鵬外その人に於けるフォルシュングとは何かを話すことが目的ではない。いわゆる、保守派鵬外という定説について異説をのべ鵬外の復権を計る

うなどと思っているわけではありません。鵬外発言をさかになして日本の学問状況をとらえるのが目的ですから、これ以上深入りすることは止めます。ただ、鵬外発言から何事か受けとろうとする場合精密な研究活動それ自体に於て自己の「生」の充足感を感じることがあるかどうかということが、学問それ自体が真に創造的な学問になっているかどうかということとともに、関連した問題として出されていることにだけ、注意を向けておきます。

鵬外の時とは違つて今日学界では先生にしろ書籍にしろすべて研究上の便宜は一応ととのつてゐる。しかし、それを生かすところのフォルシュングの精神そのものは希薄である。希薄であるだけでなく希薄だという自己認識も少ない。つまり、例えば、経済学なら経済学の何とかの科目について研究するということはあるのだが、そもそも経済学は、あるいは経済学をやっている自分は何かということも考え合わせながら専門研究をやるといふ面は希薄です。いわゆる学問研究をやりながら「心の飢え」を感じ、それによつて忍びこむものを学問の世界に生かしてゆくということは希薄です。学界に安住するか学問そのものを軽蔑するか、二者択一になりやすい。

「心の飢え」という厄介な問題は別にして、学問それ自体について考えてみましょう。

「学問は常識批判である」と通例言われています。そのことはそれ自体として正しい。しかし、学問が常識批判であるということの要^{かなめ}でもあり、また、むづかしいところは、学問という名の常識——学界で学問の常識とされているもの——を批判することです。つまり、普通の日常常識を破つて学問が出て来ますね。ところが、その途端に今度は学問的世界の常識が——学界の通念という形で——出

てくる。学界の通念に従つてテーマが立てられ、また立てたテーマの追求が、これまた学界の通念である方法に従つて行われるわけですが、学界の通念そのものが常識を破つて出来たものであると同時に、エスタブリッシュメントとして、固定化されたものでもある。その学界の通念そのものを、場合によつては何時でも打破る、——単に「非常事態」の時にだけ打破るのではなくて、通念をうけいれて研究を進めている場合でも、通念を有効な通念として意識的・仮説的に採用する——ところに、学問が常識批判であるといわれるゆえんがある。日常の常識だけではなく、むしろ学問という名の学界常識、たとえば経済学で学界通念になっている課題・範囲・方法を、あらためて(いつも)問いなおしながら研究をする、その問いなおし作業を具体的な研究作業それ自体に於て行うのが、学問であるわけですね。学界の常識のワクのなかにすっぽり入つて、単に精密にやるということ(だけ)ではフォルシュングの名に値しない。

ところが、これ(学問的世界の常識の批判)は、普通の常識を破ること以上にむづかしい。というのは、学問それ自体が兎にも角にも普通の常識を破つて出来上つたものであり、そういうものとして立派に学問的姿態を帯びていますし、他方でまた、その(学界の通念)を破るためには、学界の眼ではなく、「学問の蔽」を破つて自分の眼でみる、つまり学問の世界を出て日常の世界に立つという、一見学問とは逆行するようなことを、一つの局面として含みますから、これがなかなかむづかしい。学界に長くいればいるほどむづかしいのです。限られた努力の配分が学界に傾いて学問の論理への眼くばりの余裕がない。

ある領域で学問を長年やつておりますと、自分がやっていることがそのまま学問創造であり(それだけが)学問であると思いがちで

す。しかしそれは本当のフォルシュングではない。場合によっては、フォルシュングの精神に対抗するものにさえなります。だいたい学問の歴史を考えても、そういうことで大きな学問的創造ができたためしはありません。社会科学のほうでは、とくに、歴史的遺産に取りくむことが研究上必要ですけれども、その学史的の研究に於ても、単に学説として出来上ったところだけをみるのではなく、学問創造の全過程を復元することが要求されるわけです。我もまた一フォルチャーとしてささやかながら学問の創造をと念願すれば。

ここで私はようやく「学問と芸術」という主題に接近してきたわけですが、もう一押し、「研究」という言葉がいかに「ほんやりした」言葉であるか、フォルシュングに当る英語インクワイアリーを例にとって、考えてみることにしましょう。

3

ウィリアム・ゴッドウィンという人を御存知でしょうか。イギリスの産業革命の初期に私有財産制度の可否を論じ、マルサスに反論として「人口論」を書かせた、あの人です。

産業革命、とくにはその初期は御存知のように貧困がもつとも猛威をふるった時代で、労賃は安い、パンの値段は（ナポレオン戦争の影響もあって）どんどん上る。ということで盗みだとか「犯罪」が頻発する。「風俗」もみだれる。そこで法の厳正な適用が声高くさげられる。そういう時代です。ところで——とゴッドウィンはいいます——正義は守られねばならない、ならないんだが「法の厳重な適用」を叫ぶ前に、そもそも正義とは何かをまず問わなければならないのではないのか。

一方で飽食で病気になるながら値上げをまけてパンを買占めているのがある。他方、このパンの一切れがあれば妻子の生命が助かる

というのがあつてパンを盗む。その盗みは盗みであるか。確かに法の眼から見れば「盗み」は正義の蹂躪である。しかし、それは、私有財産制度を動かぬ前提として考える既成の法通念に立つからだ。法の常識の外に出てみよ。そして、生存は何よりも重大だという、個々人にとってきわめて明白な事実から出発してみよ。もしも正義が、他人を自己と同等に、フェアに取扱うことを意味するものであるならば、一般に、すべての人間に対して「生存権」をあらゆる権利に（私有権にも）優先する基本的な権利として承認すること、これこそが正義の要求であることは明白だ。この視角からすれば、「盗みの頻発」という同じ事実、その発生理由についての別個の解釈を、したがつて別個の対策を要するものとして現われるであろう。正義とは何かを問う。学界と日常常識を貫く通念を、通念によつて見失われた平明な事実をもとにしてこわす。この作業を持たないで正義についての研究をしても学を樹てることにはならない。ということでは彼は *Enquiry concerning Political Justice* という本を、また *Enquirer* という本を書いた。この場合 *Enquiry* は、研究という言葉でわれわれが普通通念に思い浮べるものではおおいにくせないものを持つ。いわずや *Enquirer* という標題を「研究者」と訳すと、何のことだか解らなくなってしまうでしょう。

「研究」で誤訳ではないんだが、研究という言葉が本来もつキバがぬきさられてしまう。そこに問題があるんです。研究が始まるどころ、現実と学問との接点をぬきにして、もっぱら外国の学界の交流の中で、当初は研究の成果を全面的に外国に負い、その後そういうものとしての研究水準の上昇を狙いにして輸入学問を輸出学問にまで高めてきた。こうして学問は輸出学問に成長した。しかし、現実との接点を欠いている点で、輸入学問の性格を脱していない。

それが「研究」という言葉にまといつていられるとおもわれるんです。「尋ねる」という「研究」以前のごく日常的な面、「研究」をこえて哲学に近づくと、この両方が「研究」という言葉からはみ出しなす。

「研究」という学界的視角だけでゴッドウィンを学史的にあとづけると、ゴッドウィンは「研究史」の中におさまりにくい。粗雑だと言で片付けられそうです。学問的に粗雑といえは確かに粗雑です。少なくとも学問的作品としてこれを見れば。しかし、研究に精密な研究という学界常識を捨てて、学問の歴史をインクワイアリーの歴史という視角からみなす。そしてその視角からゴッドウィンを見ると、かれの問いは、その学問的追求を後世の我々に残したものととして、学問の歴史のなかに生きている。

そういう角度からの研究を持たないと、われわれ自身、ささやながら一箇の学問的創造者として外界に起っている問題を学問的世界におくりにくくすることが出来ないのではないか。

アダム・スミスの「国富論」——*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*——の場合もそうです。

近世初頭以来、ヨーロッパ諸国が至上命令としてきたのは「国力と富の増大」ということであつた。オリンピックが錦の御旗になつたことがありますね。東京でもそうでしたし当地サッポロでもそうだったでしょう。オリンピックの名さえ持ち出せば、ふだんやれそうもないことが強引にやれる。あれをもっと壮大にしたと考えればいい。「国富増大」が至上革命としてかかげられ、スミスの言葉を使えば、リーズン・オブ・ステイト（国家理性）の名の下に、オーディナル・ロウズ・オブ・ジャスティス（正義の常法）が破棄される。これによって例えばイギリスではコモンウィールがコモンウ

エルスに転回したが、イギリス以外の国では、コモンウィールの成長を押しつぶしながら絶対主義が牢固たる建造物になつた。その至上命令の問いなおしがスミスの学問です。

「国富の増大」「国富の増大」とロクに人は、また人々の日常常識をそのまま理論化した経済学（重商主義の経済学）はいう。しかし、国富とはそもそも何か。国富増強政策は果して真の国富を増大するものであるか。それをスミスは、経済学の通念や日常の常識を捨てさえすれば誰にでも「極めて明白なはずのこと」を手がかりに、問いを發しては学問的に答えてゆきます。

「国富」となるとむづかしい。もっと平明な事実から出發しよう。そもそも「富国」とは何か。どんな状態をさしてある国が富んでいるというのか。ある国の成員の大部分が貧乏で苦しんでいるのに、その国をさして富国とはまさかいいえまい。このことは学問にきくまでもなく（学問にききさえしなれば）「平明な事実」だ。ところが現実には奇妙なことに「富国」ではなく「貧国」をめざしているとしか思われない政策が「富国政策」の名で通っている。富国政策なるものを正面きつて押し進めている国ほど、その国の大部分の人間——それはいうまでもなく働く人間です——は貧乏だ。そういう富国政策が至上命令として出され、また、受け入れられているということは奇妙だが現実である。そこでスミスは、真の富は何であり如何にして富は増大するか、また、それを阻げるのは何かということとを、どうして一見平明なはずの事実にあらがつて変てこな国富概念や富国政策が出てくるかということとともに明かにした。そこに経済学に於けるコペルニクスの展開が行われたわけです。この経済学に於けるコペルニクスの転回——労働価値論の成立——が、経済学説における、経済学の内部での、コペルニクスの転回であると同